別紙様式１

令和元年度　学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	■共同研究推進　□若手教員研究支援　□個人研究支援 □研究推進重点設備　□研究推進設備修繕
プロジェクトの名称	中学校美術科担当若手教員の支援プログラムの開発
報告者氏名・所属・職名	花輪　大輔・札幌校　准教授
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	更科　結希・北海道教育大学附属釧路中学校・教諭 工藤　雅人・北海道教育委員会・教育政策課・主幹

研究内容及び成果の概要

本研究は，術科教員配置数の減少に伴う研修機会の縮減・喪失等による美術教育の質的低下が課題とされる北海道において，教職課程コアカリキュラムの「到達目標」（以下到達目標）を活用し中学校美術科担当若手教員実態を把握するとともに，それらの知見を活かした支援プログラムの開発を目指したものである。

2019年7月から8月にかけて，北海道内の中学校美術科担当若手教員20名を対象とした到達目標の理解度に関する調査を実施したところ，11件の有効回答があった（経験年数Ave.：2.65年，S.D：1.51，年齢Ave.：24.3歳，S.D：1.16）。質問項目及び回答の平均値，標準偏差を以下表１に示す。尚，調査は7件法で実施した。

（7：とても理解している，6：理解している，5：どちらかといえば理解している，4：どちらでもない，3：どちらかといえば理解できていない，2：理解できていない，1：全く理解できていない）

表１．教職課程コアカリキュラムの「到達目標」理解度	Ave.	S.D
1. 学習指導要領に示された当該教科の目標や内容を理解する	3.53	
1)　学習指導要領における当該教科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解している。	3.36	0.674
2)　個別の学習内容について指導上の留意点を理解している。	3.18	0.603
3)　当該教科の学習評価の考え方を理解している。	4.27	0.786
4)　当該教科と背景となる学問領域との関係を理解し、教材研究に活用することができる。	3.18	0.874
5)　発展的な学習内容について探究し、学習指導への位置付けを考察することができる。	3.64	0.809
2. 基礎的な学習指導理論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける	4.27	
6)　子供の認識・思考、学力等の実態を視野に入れた授業設計の重要性を理解している。	5.18	0.603
7)　当該教科の特性に応じた情報機器及び教材の効果的な活用法を理解し、授業設計に活用することができる。	3.64	0.924
8)　学習指導案の構成を理解し、具体的な授業を想定した授業設計と学習指導案を作成することができる。	4.18	1.168
9)　模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けている。	4.64	0.505
10)　当該教科における実践研究の動向を知り、授業設計の向上に取り組むことができる。	3.73	0.786

また，各質問項目間で強い正の相関が認められたのが1−4（r=0.78,p=0.01），3−9（r=0.77,p=0.01），1−7（r=0.74，p=0.01），2−6（r=0.62，p=0.04），3−6（r=0.70，p=0.01），6−9（r=0.70，p=0.02）であった。また，負の相関を4−10（r=—0.71，p=0.02）に確認した。

表１からは，到達目標に関する理解度が総じて低調であり，特に学習指導要領の目標や内容の理解度に問題があることがわかる。本調査に協力をした若手教員は，目の前にいる様々な子ども実態把握を大切にしながら，日々の授業を改善しようと努力をしていると推察できるものの，目標や内容の理解度が低調であることから，指導と評価の一体化自体に疑義が生じるところである。特に学問領域を背景とした教科の目標・内容・構造の理解促進と，それらを具体的な指導や評価に落とし込むためのプログラム開発が必要であるとの結論に至った。

そこで夏季休業中に，プロジェクト担当者が講師を担当し本学札幌校にて研修講座を開催したところ，本調査に協力をした若手教員のうち５名の参加者があった（経験年数Ave.：1.2年，S.D：1.79，年齢Ave.：24.5歳，S.D：1.41）。主に，北海道美術教育の概観と問題の所在について（工藤），美術に関する学問的背景と学習指導要領について（花輪），それらを可視化しつつ授業設計とその構造を具体的な実践と結びつけた演習（更科）を実施し，そこでの学びを反映させた実践の発表会と，到達目標理解度のポストテストのために，春期休業中に再度研修講座を実施することとした。しかし，新型コロナウイルス感染症への対応のため，本学危機対策本部の方針に従い研修講座を中止としたため，支援プログラムの効果の検証には至っていない。

本研究においては，支援プログラムの有効性の検証には至らなかったが，中学校美術科担当若手教員の教職課程コアカリキュラムの「到達目標」の理解度，及び各項目間の相関を明らかにすることはできた。それらの知見を教員養成の講義内容に反映させるとともに，本研究の取り組みを継続し，より効果的な支援プログラムの開発につなげていきたいと強く思うものである。

成果の公表の状況

【著書】なし
【学術論文】北海道教育大学紀要に投稿予定

教育現場で活用可能な分野・教材等

若手教員を対象としたに美術教育関する研修会，または美術教育に関する教員養成などで本研究の結果を利用可能である。

配布又はダウンロード可能な資料	要望があれば，夏季研修講座資料を送付いたします。
問合わせ先	代表者：花輪大輔 TEL/ FAX：011-778-0968 mail　：hanawa.daisuke@s.hokkyodai.ac.jp